

Newsletter

September 2018

<http://www.aack.or.jp>

目次

カムチャッカの山スキー 安仁屋政武.....1	第46回雲南懇話会のご案内15
回想 1955年3月毛勝から剣への合宿 酒井敏明6	会員動向16
笹ヶ峰京大ヒュッテ 昭和40年・改築事業の思い出 前田 司12	編集後記16

カムチャッカの山スキー

安仁屋政武

あまり知られていないカムチャッカ半島での山スキーを、2018年3月20～29日の日程で楽しんできたので紹介する。メンバーはロシア人のガイド、日本からのガイド（富良野在住の日本語を喋るオーストラリア人）と私を含めて6人の参加者で、北海道十勝界隈で滑って知り合った仲間が中心である。女性は1人、ガイドを除いた平均年齢は70を超える、じじばばパーティであった。当初はグリーンランドへ行く計画であったが、人数が集まらなくて中止となり、代わりにカムチャッカとなった。私はロシアに行ったことがないので参加を決めた。

直行便がないので、まず3月20日シベリア航空で成田を発ちウラディオストックへ行った。2時間弱のフライトである。時差が1時間ある。最初西に行くので日本時間からマイナスかと思ったらプラスであった。夕方に着いたが、町の明かりがきれいで印象は良かった。ネットでは空港に両替所はないとあったので、レートは悪いが成田で少しルーブルに替えてきた。確かでない。町にもなかった。結果的に、現金を手にするにはATMでクレジット・カードを使うしかなかった。一方では、どんな小さな店で少額の買い物でもクレジット・カードが使

えた。白タクみたいなタクシーで中心街外れにあるホテルへ行く。ホテルでのWiFiの接続は今まで経験したことがないやり方で、携帯電話の番号を打ち込めという。なんだかんだで結局つながった人とつながらなかった人がいた。私はPCだったのでつなげられなかった。個人の携帯電話もモニターするのだろうか。

3月21日（水）

皆初めてなので町の観光である。気温-14℃で風がある中、午前中はホテルから歩いて10分程度の所にあるレーニン像を見てシベリア大陸横断鉄道の東の起点駅へ行った。驚いたことに、駅構内に入るのに持ち物のX線検査がある。構内を歩く順序も決まっており、戻ろうとしたらダメと言われた。その他、第二次世界大戦で実際に使った潜水艦（C56）を改造した博物館、金角湾と金角橋を眼下に望む鷹巣展望台などに歩いていった。遠くには湾外の海水の帯も見えた。歩道は2～3日前に降った雪が日陰では凍り注意して歩かなければ危険な状態であった。走っている車のほとんどは日本車で、道路は右側通行であるが直輸入の右ハンドルが多い。



写真1 左がコリヤクスキー火山、右がアヴァチンスキー火山、下がペトロパブロフスク=カムチャッキーの町。小屋は両火山の鞍部より少し下にある(2018年3月22日、安仁屋撮影)

午後からは昨日と同じタクシーで新しくできた金角橋と同時に開通したもう一つの橋を渡り、ルースキー島へ行った。金角湾に架かる橋の建設(2012開通)で対岸と島の開発が大々的に進んでいる。ウラディオストックは軍港だったので1991年まで外国人の立入が禁止されていた。至る所に朽ち果てた建物や施設の残骸など基地の名残がある。

3月22日(木)

午前1時過ぎにホテルを出て空港に向かう。カムチャッカの首都、ペトロパブロフスク=カムチャッキー(Petropavlovsk=Kamchatsky以下PK)へ行く便は明け方4時前出発である。フライトは約3時間、到着が現地9時(+2時間)なので、早朝の出発はその日にビジネスができることを狙っているのだろうか。サハリン南部を横切ると海水が現れた。着陸直前に我々が行く予定のコリヤクスキー(Koryaksky)火山(3456m)とアヴァチンスキー(Avachinsky)火山(2741m)が見えた(以下、K火山、A火山、写真1)。両方とも活火山で、K火山は最近では2010年に噴火しているし、A火山は今でも噴気を上げている。気温は-15℃とのこと。空港を出たところでロシア側のガイドに会う。地元出身だが、シャモニーに住んでいて、主にコーカサスとカムチャッカで山スキーのガイドをしているという。タクシーで中心街外れにあるホテルへ10時過ぎに到着。顔写真、VISA、入国証に加えて、パスポートの他国への出入国

のスタンプがあるページもコピーを取られた。当に情報収集である。昼食は歩いて中心街へ行き、地元民相手のカフェテリアへ入った。我々の間でロシア語を喋る者はいなかったが、なんとかあった。夕食は観光客用の少し高級なレストランで英語を少し喋るウェイトレスがいた。しかし、注文がタブレットなので操作に時間がかかった。メニューには料理の写真とロシア語名、英語名に加えて中国語名があり、中国との結びつきを実感する。戦前はカムチャッカに夏の間、日本人漁業関係者が1万5千人も来ていたという。が、その痕跡はどこにも見あたらないし感じることもなかった。

3月23日(金)

快晴; PK — アヴァチンスキー小屋 — A火山斜面(~1600m) — 小屋

8時過ぎ、2台の車で出発。山小屋での食事のためにルドルフという若いコックが同行する。9時前、雪上車への乗り換え地点に到着。新潟にある大原鉄工所の1987年製で、テンパーと呼ばれる左右2つの垂直のレバーで方向を操作する。南極の雪上車を思い出した。岳樺の林を走り抜け、K火山とA火山の間にあるアヴァチンスキー小屋へは10時頃着いた。標高870mぐらいである。600mから上では植生は皆無で、いわゆる無木立斜面である。行く前、山小屋と聞いていたので、なんとなくヨーロッパの山小屋をイメージしていたが、我々が泊まる所は、長方形の箱で(7×4mぐらい)、中は2段のバンク・ベッドが5つと薪ストーブ、小さなダイニング・テーブルがある狭い作りであった。寝具は封筒型の寝袋である。幾つかのこのような小屋に加えて、大きな共通の食堂小屋がある。トイレは共同で20m位離れており、周辺は凍っているので足下に細心の注意が必要である。ドアは建て付けが悪く閉まらない。夜中のトイレが厳しい。

昼食後、A火山の山腹を目がけて出発する。青空であるが風が冷たい。スノーモービルの跡がある傾斜の緩い斜面を登ると上にも小屋群があった。古いスキー跡がかすかにあったがわれわれの滞在中、他にスキー客はいなかった。ロシア人のスノモ客は何人かいた。ボウル状の斜面を目がけて登る。雪の状態は、硬い、クラスト、柔らかい、ところどころと変わる。標

高1600m程度の所から滑りだす。出だしの雪は少しクラストしていたが、すぐに柔らかくなり斜面の傾斜も手頃でトラックを並べて、山スキーの醍醐味を満喫する。これだけでも来た甲斐があったと満足の声が上がった。

小屋では専用のコックがいるので、美味しい魚スープと燻製サーモン・クリームチーズを載せたカナッペが待っていた。夕食はソーセージとポテトのソテーで、これもまた美味しかった。ルドルフはなかなかの腕前のコックである。多くの場合、現地ガイドが食事も作るとのことであるが、今回はガイドに専念するためにコックを連れてきた、とのこと。正解である。

夕食の後、小屋に戻るため外に出ると満天の星空で、下を見るとPKからイエリゾボ(Yelizovo)にかけての町の明かりが帯状にきれいだ。思っていたより明るい。

3月24日(土)

快晴；小屋 — A火山頂上間近(～2100m) — 小屋

K火山とPKを隔てた対岸にある山々のモルゲンロートが美しい。朝食はミューズリとロシア・パンケーキである。通常のヨーグルトに加えて、やや緩く少し酸っぱいロシア・ヨーグルトもある(日本の飲むヨーグルトを少し濃くして酸っぱくした感じ)。昼飯は各自好みに合わせて作る。具はソーセージ、サラミ、チーズ、サーモンとオヒョウの燻製などで、パンに挟んでサンドイッチにするか、あるいはピータパン?に載せてラップにする。これに行動食としてmars, snickers, marble chocolate, etcが入った袋がある(これはほとんど使わなかった人が多い)。

出発前に、今日の目標はA火山の尾根の上に僅かに黒く見えるピナクルを目指すとの説明がある。地元のガイドは2時間半ぐらいと言ったので、我々の足では3.5～4時間ぐらいかなと思った。ぱっと見ではそれ程遠くには見えなかったが、行けども行けども近づかず、結局昼食も含めて5時間以上かかった(写真2)。やはりスケールが大きい。シールを外した標高約2100mの尾根(写真1のA火山の左の肩付近)の上には小さなアンテナが立っている。多分、火山地震のモニターではないかと推測した。

出だしは急傾斜に加えて雪が硬く雪面の凹凸



写真2 アヴァチンスキー火山を登高するパーティ。先頭(日本側ガイド)から5番目が筆者(3月24日、ロシア側ガイド撮影)

が激しいのでガイドの後を慎重に滑り降りる。途中、トラバースして柔らかい雪の斜面を見つける。この後は、ガイドのトレースの側の斜面を思い思いに滑る。1時間の滑りであった。

チキンスープとトナカイ肉のサラミとキュウリが載ったカナッペが疲れた身体に染み渡って行った。夕食は脂の乗った焼きオヒョウと温野菜で美味しく、ワイン(因みに、チリ産でロシアでも人気)と共に堪能した。

3月25日(日)

晴れ後快晴；小屋 — コリヤクスキー火山斜面前面(～1400m) — 小屋

朝起きると白い薄雲に覆われていたが、午前には快晴となった。今日はK火山の麓を目指す。9時過ぎに出発。薄日であるが風が無いのでまもなく暑くなる。雪は少なく石が結構ごろごろしていて、北海道の十勝岳みたいである(写真3)。雪面を縫って登るが、雪は結構硬く、氷化している箇所もあり、今回初めてクトーをつ



写真3 コリヤクスキー火山山麓を目指す(3月25日、日本側ガイド撮影)

ける。昼頃、標高 1400m を過ぎた所で雪面が少なくなり、ガイド 2 人が下の谷へ降りるルートを偵察に出る。結局、ルートは歩行アイゼンなしでは危険なので（因みに前 2 日は持ち歩いたが使わなかった。皮肉にも今日は持ってこなかった）、ここから滑り降りることにして昼食とする。ロシアのガイドの話では 1～2 月のコンディションと同じとのこと。この頃には太陽も燦々と照り暖かく風もないので、北海道の 4～5 月のような、と話しながら食べる。

滑り始めの斜面は、傾斜は緩いが氷なので慎重に横滑りで雪の所まで降りる。傾斜が緩く硬い雪の上に柔らかい雪が数センチ載っている斜面で思い思いに滑り降りる。1 箇所やや傾斜のある斜面で皆楽しんだ。小屋には 2 時前に帰着。今日は 4 時過ぎからサウナをやる予定であるが、それまで時間があるので、ロシアのガイドがカムチャッカのスライドを見せてくれた。夏のきれいなお花畑に加えて、カムチャッカの西岸を冬に行く（氷が張っているので通れる）、6 輪駆動のトラックの動画は迫力満点であった。

4 時過ぎにサウナに入ったが、とても気持ち良くさっぱりとした。夕食はチキンのソース煮とご飯、ギリシャ・サラダで美味しかった。腕の良いコックのお陰で毎日の食事を楽しんだ。

3 月 26 日（月）

晴；アヴァチンスキー小屋 — パラトゥンカ谷の山（ミキジンスキー山？） — ホテル（Hotel Bel-Kam Tour）

天気は下り坂か？ 薄曇りで A 火山には笠雲が、K 火山中腹には筋雲が懸かっている。迎えの雪上車 2 台で 9:20 頃出発。下りは早い。標高差 800m 程度はある車への乗り換え地点には 10 時前に着いてしまった。

パラトゥンカ（Paratunka）へ行く途中、ATM での現金化と土産の購入のためイェリゾポのスーパーマーケット WAMCA に寄る。思ったよりも品は豊富であった。

幹線道路からソ連時代のリゾート施設の名残がある枝道路に入りどん詰まりの所から登る。周りは樺林で日本、特に北海道と雰囲気と同じである（写真 4）。日本（北海道）に 5 回来たことのあるロシアのガイドはこの景色を Kamkkaido ともじっていた（私は Kamchakkaido の方がいいのでは？ と思った



写真 4 パラトゥンカ谷の標高約 570m の山の景観。樺の疎林で北海道（十勝）にそっくりである（3 月 26 日、安仁屋撮影）

が）。この周辺は、標高は低いが海岸に近いので積雪は多く 2.5m ぐらいだという。目指す山は標高 570m 程度で、滑った跡がそこここがあり、ポピュラーな山であることが分かる。太陽が出てくると標高が低いので暑い。昼食後、滑り降りたが標高が低く気温が高いので雪は悪く、あまり楽しめなかった。

ここの宿は屋外に温泉プールがある新しいリゾート・ホテルである。水着を着て備えつけのバスロープでプールへ行く。湯槽は 3 つあり、一番大きいのは 15m×10m ぐらいである。水深は深くて 150cm ぐらいある。ヨーロッパからの先客がいて、大勢が瓶ビールを飲んでいる。瓶が割れたらなどと野暮なことは考えていない大人の対応か？ 湯温は体温に近い 36℃ で長湯ができる。因みに温泉の成分表はなかった。

足がないので、夕食はホテルのレストランで摂る。我々に加えてスイスの会社のヘリスキー客が 40 名位いた。24 名乗りの大型ヘリで行くとのこと。

3 月 27 日（火）

薄曇り、小雪；ホテル — 中央の谷沿いの山 — ホテル

朝、鳴る筈の目覚しが鳴らない。同室者の目覚まして飛び起きた。時計を見ると時間が昨日合わせたのと違う。2 日後に判明したのだが、デジタルの電波時計なので夜中に勝手に日本時間に合わせていたらしい。普段はアナログの時計を持ち歩くが今回は何かの弾みでデジタル時計を持って来てしまった。注意が必要である。今日は遠出で登る山の候補が 2 つあり、雪の状態を見て決めるという。最初の候補地は良くないと言って、次の候補地、中央の谷の山を

目がけていく。途中、車客相手の店が並ぶところで、パイが美味しいという店に入る

外に出たら小雪がちらついていた。10時半頃、目指す山の麓近くの道路脇で停車、標高は200mぐらい。シールを貼り、昼飯を作って出発の準備をする。ガイドが昼飯用の具を入れてきたクーラーにピックで開けたような穴が幾つか並んでいる。グリズリーの爪痕だそうだ。熊の存在を身近に感じる瞬間である。

目指す山は標高570m位で、11時頃歩き始める。暑い。周りの地形、植生などの景観は北海道と全く同じである。雪は良い。途中470m位のピークを過ぎる時、一時的に小雪がちらつき冷たい風が吹く。570mのピークには1時前に着いた。眼下の中央の谷には来た道路と蛇行している川が見える。両側は標高500～700m位の山が連なっている。遠くには火山も見える。

昼食後、登ってきた尾根の脇へ滑り出す。雪は良いが急斜面だ。470mのピークを目がけて登り返し、車に戻る。ホテルには5時過ぎに帰着。

温泉プールに行く前にビールとワインで喉の渴きを癒す。温泉ではヨーロッパから来たグループと交歓する。聞いただけでもツェルマット、ウィーン、ザルツブルグなどいろいろなところから来ている。ヘリスキーかと聞いたら、歩いて登ると言っていた。

3月28日(水)

曇り；ホテル — 近くの小山 — ホテル — PK — ホテル

朝、時計を見たらやはり昨晚合わせたのと違ふ。どんよりとした曇り空である。アヴァチンスキー小屋にいた時の天気の良いさに感謝する。

今日は近くの山に行き、午後2時頃には戻り、PKにショッピングとロシアのガイドを交えた最後の夕飯に行く予定で行動する。9時過ぎに出発。すぐに道路から外れた除雪車両置き場みたいな広場で降りる。標高は70mぐらい。暖かい。10時前に出発。雪はクラストしていて重たい。日本と同じような樺林の中をしばらく歩く。570mのピークには12時半頃到着。パラトゥンカの谷が眼下に広がる。

昼食後、滑り降りるが、雪は硬く重たくてクラストしており最悪であった。溜まった疲れも

あって、私は何回か転んだ。ホテル帰着は予定通り2時過ぎであった。

少しゆっくりして3時半にタクシーでPKへ出発。まずスーパーマーケットWAMCAへ行き、土産を買い足す。仲間の一人が現金で払おうとしたらカードでないとダメだと言われた。ここには数種類の生ビールをプラスチックボトル(1.5L)にその場で入れる量り売りの設備がある。物珍しいので帰ってから温泉プールで飲む為に2つ購入する。3Lで日本円にして約700円と、安い。

夕食は町の中心部にある新しい建物に入っている‘Da Vinci’というイタリアン・レストランである。とてもしゃれていて、働いている若い女性達は皆、人形のような美人である。イケメン・ウェイターもいる。カニサラダ、トナカイ肉スープ、ムース(へらじか)のステーキなどを堪能した。他の客はいかにも金持ちという感じの上品なロシア人である。ロシアのガイドは彼の会社のステッカー‘Skiing in Kamchatka’大小2つを土産としてくれた。

3月29日(木)

曇り；ホテル — ペトロパブロフスク＝カムチャッキー — ウラディオストック — 成田

帰国の朝、どんよりとした曇り空で夜中に降った雪がうっすらと(2～3cm?)積っている。寒い。滞在中、本当に天気に恵まれたことを改めて実感する。空港へは8:20に到着。車はなんと出発建物に横付けできない。遠くに止めて建物に入るには雪の積もった広場を距離にして40mぐらい荷物を担ぐか引っ張って行かなければならない。建物に入るとすぐにX線検査があり、ここを抜けてチケット・カウンターに行く。しかし、なぜか混乱していて検査を何回もやり直しさせられた。空港から外を見ると視界はほとんど効かない。

バスに乗って飛行機の搭乗口へ行く。霧雨が降っている。ウラディオストック便はガラガラである。離陸して間もなく飲み物と機内食が出たが、食前の飲み物は水、リンゴジュース、オレンジジュースの3つのみ。食事は魚とチキンのどちらがいいかと聞かれ、魚と答えたが、開けてみるとチキンであった。

樺太南部を横切って、ウラディオストックには現地時間で11時過ぎに着いた。快晴で気温

は9℃、来たときと大違いである。国際線への乗り継ぎ客は我々のみであった。国際線の出発ロビーには土産物屋がいくつかあり、最後の買い物をする。成田便は満席であった。新潟上空を抜けて成田には2時半前に着陸。飛行場の周りの桜が満開なのには驚いた。気温はなんと24℃だという。帰りは1日で一気に‘冬から夏へ’であった。

ロシアは初めてで、極東はモスクワ、サンク

トペテルベルグなど文化の中心とはかなり違うと思うが、食事、ビールなどを含めてそれなりに楽しめた。雪はまあまあで、天気恵まれたのが大きい。他方では、やはりロシアかという先入観を助長するようなことも多々あった。

参考までに費用の概算は、航空運賃が約6.5万円、業者への支払いが約30万円、その他（食事など）が約2万円であった。

回想 1955年3月毛勝から剣への合宿

酒井敏明

はじめに

京大山岳部は第二次大戦終了後間もなく創設され、現在まで70年余の歴史がある。私が山岳部員として参加した山行を思い返すとき、3回生だったときの毛勝三山から剣岳までの稜線踏破を目指した春山合宿は、重要でかつ忘れがたいものの一つである。その詳細は『報告』第5号に30ページほどを費やして報告されている。さいわい近年はネット検索でAACKのホームページを開くと、高村泰雄さんの「積雪期毛勝三山から剣岳」報告圧縮版と写真10枚を見ることができる。

1955年3月は今から63年前になるのだが、今年3月23日富山県魚津市の駅前に近い料理屋海風亭に当時の隊員8人が集まって記念の会を開いた。関西圏から中島道郎、平井一正、高村、

岩坪五郎、高野昭吾と酒井が、首都圏から並河治と松浦祥次郎が参加した。隣県上越市在の横山宏太郎さんは誕生年が遅かったので当時はまだ京大生でなかったが、幹事の誘いに応じて銘酒一升をさげて参会してくれた。身内にご不幸が起こり直前に欠席となった斎藤惇生さん、呼び掛けに回答されたが参加不可となった潮崎安弘と荻野和彦などお三方もそれぞれ昔の合宿に相応の感慨を覚えられたことであろう。ザッカス（脇坂誠）やガイガー（田附重夫）など早すぎた人をはじめすでに故人になった仲間も5本の指を上回っているようだ。

毛勝山ふもとの魚津の小宴はそれなりの珍味佳肴が供せられ、参加者のだれもが若かりし日の雪山での苦しみや楽しみを語り合うことができ、充分に意義ある会合であった。もう少し早くに開催していたら参加者がもっと多く、賑やかで良かったと思われる。

山岳部に入ったころ

少し古い話になるが当時の山岳部の様子を振り返ってみることを許していただきたい。

私は1952年京大に入学し、宇治市黄檗にあった宇治分校に通いはじめたとき、新入部員募集ピラに誘われ山岳部に入部した。道場岩場における予備合宿を済ませ、7月14日京都駅を夜行SLで出発、剣の夏山合宿に参加した。初めての北アルプスであった。

早朝国鉄富山駅から富山地鉄に乗り換え、終点藤橋駅でおりると近代的交通機関はここで終わり、歩行が始まる。称名滝を横目に八郎坂を



写真1 記念集会出席者たち 奥から前へ
左列 中島 平井 高野 横山
右列 高村 酒井 並河 岩坪 松浦



写真2 猫又山頂上から剣岳本峰方面を望む（1955年 撮影者平井）

登り弥陀ヶ原の一端にとりつき、さらに歩いて追分小屋にたどりつくと泥のように眠った。二日目亜硫酸ガスたどよう地獄谷を過ぎ、雷鳥沢の急登で大汗をかいて剣御前小屋前で大休止、剣沢雪溪の雪上歩きに肝を冷やししながら夕闇せまるころ真砂沢野営地に到着した。

この合宿にはチーフリーダー藤田陸奥麿以下部員22名が参加、2回生6人、1回生は左右田健次、高谷好一、酒井など7人であった。1、2回生は3回生のパーティ・リーダーが指導する5班に分かれ、藤田と4回生部員のアドヴァイザーたちは一歩さがって全体に眼を光らせる仕組みであった。長次郎雪溪、平蔵雪溪の雪上技術、ハツ峰、源次郎の尾根歩きや岩登り、日替わりで交代し飯盒と大鍋で食事をつくる炊事当番など、好天に恵まれプログラムは順調に実施され、所期の目的は達成されたと思う。合宿最後の晩には巨大焚火を囲んで「雪よ岩よ」をはじめ寮歌や民謡など数多くの歌を声をかぎりに歌った。合宿が終わるとあとは小グループの分散山行に移った。

この年の秋今西錦司さんが日本山岳会のマナスル登山隊の先遣隊を率いてネパールに入り、戦前の立教大学のガルワルヒマラヤ、ナンダコット隊から16年遅れてヒマラヤに初見参した。京大出身の中尾佐助、林一彦両氏なども参加したこの踏査隊はマナスル峰登山ルートを発見し帰国した。この年末から翌年正月にかけて笹ヶ峰ヒュッテのスキー合宿に参加した私たち若輩部員は、リーダー松田敏、サブリーダー菊池卓郎、それにアドヴァイザーとして参加した藤田陸奥麿、本仁久一郎らの先輩部員たちの指導のもとにスキー練習に励んだことは言うまでもないが、暗い灯油ランプのもと夜ごとに聞かされたのはマナスルのことであり、またそれ以上に「知床」であった。この同じ冬に京大山岳部の主力部員たちが総力を挙げて、ほとんど未開の辺地であった知床半島脊梁山脈に積雪期初トレイスを目指した縦走計画である。

ヒュッテでくりかえし語り聞かされた「しれとこ」計画は、4月に2回生になり吉田分校（現在の人環学部所在地）に転じてからは西部構内

南西隅にあったルームに足繁く通ったから、縦走隊の絶望的な苦難の踏破行や迎え入れ役支援隊の憂慮と再会の喜び、はては硫黄山や羅臼岳のスキー登頂など、先輩たちから直接知床体験を聞かされるたびに、若輩下級生部員たちは感嘆を新たにしたのである。5月に入るとJACマナスル登山隊が頂上まで僅か高度差375mを残して撤退を余儀なくされたことが報ぜられ、一方では西堀栄三郎さん孤軍奮闘の折衝でやっと得られた登山許可をJACに移譲してしまった無念、そして今西壽雄さん隊長のアンナプルナⅡ峰遠征隊派遣が急遽決定と、事態は急転回した。大戦末期に京大に入学してAACKに接触できなかった山岳部草創期の先輩たち、伊藤洋平、藤平正夫、舟橋明賢などが、さらに知床隊員であった藤村良、脇坂誠など若いOBたちがAACK宿願のヒマラヤ遠征隊員に選ばれたので、現役部員たちの意気はますます高くなった。

若手のOB脇坂ザッカス

アンナプルナ隊は最初に取り組んだ南面に登路を発見できず、ナムンバンジャン峠を越えて北面に転じ、IV峰(7525m)登頂を目指したが、迫りくるジェットストリームの強風にCV(7100m)テントを破られ、登頂を目前にして撤退を強いられた悔しい結末である。

アンナプルナ帰りの脇坂先輩(以下愛称ザッカスとも呼ばせていただく)は大学院農学研究科在籍であったため絶えずルームに現れ、現役部員たちを激励叱咤し、またわれわれと山行を共にすることしばしばであったが、そのザッカスが提唱し強く推薦したのが毛勝三山から劔岳への極地法登山計画であった。毛勝山の麓を故郷とする彼と、同じく富山湾岸高岡出身の藤平先輩にとって、劔岳頂上から北へ延びて黒部川と片貝川の分水界をなし、池平山、猫又山、毛勝山など2500mクラスのおだやかな円頂を隆起させるこの劔北方稜線はいやでも無視できない存在であった。京大山岳部でも過去に企画されたが実力を備えた部員が不足し装備類も貧弱で、取りやめになった経緯があった。

私が3回生になった54年春には55年3月に毛勝をやるとういう機運はすでに醸成されていたと思う。事実54年夏斎藤惇生チーフリーダー指揮の真砂沢合宿において、中島道郎さん



写真3 劔岳頂上方面を走行中列車から撮る

と私は偵察隊として特派された。真砂沢泊地から二股、仙人池を過ぎ、大窓雪渓を登り、大窓・池平山経由で小窓に着いて露營、2日目に小窓頭、小窓王肩、三ノ窓に寄り、池ノ谷乗越から真砂沢に戻った踏査行は、春山準備の一環としておこなわれたのである。

はじめのうちザッカスはOBの平井(ポコ)と二人で毛勝から劔まで縦走する案を温めていたのだが、部のチーフリーダー斎藤(ワイ)とアドヴァイザー中島道郎(ダンナ)の医学部4回生コンビが万難を排して参加すると表明、中核的活動を担うべき3回生も高谷(ハッツァン)、酒井(オシメ)と二人いたので、この陣容であれば極地法でやれそうだと、山岳部の総意が次第に固まってきた。

春山合宿は極地法で

この計画では毛勝山西北尾根が第1区間になるのだが、10月19日～21日左右田(ガンコ)と高村(デルファ)が偵察隊として魚津から片貝川に入り、北陸電力片貝川第4発電所に挨拶し、翌3月に取水口事務所の施設一部を合宿用ベースハウスとして借用する許可を得たいとお願いし承諾を得た。東又谷から阿部木谷に入り、毛勝山南北双耳峰のあいだに這いあがる、高度の割に長大な雪渓をもつ毛勝谷を詰めて登頂、途中阿部木谷の支流宗次郎谷分岐点あたりで、西北尾根からおりてくる支尾根のうち登路に使えそうなものを物色、候補地を見つけることができた。11月23、24日には高谷(ハッツァン)、高村など5人の荷物隊が出動、「乾パン900食、缶詰ガソリン450cc入り80缶、テント2張り

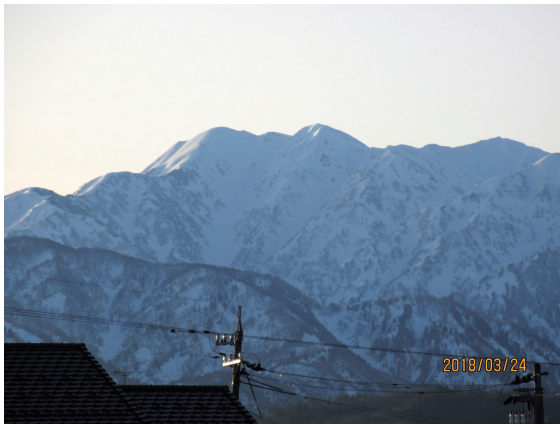


写真4 魚津市街地から見た毛勝山双耳峰と毛勝谷上部

など計50貫(約190キロ)の荷物」を魚津駅からオート三輪で運び、第4発電所から先はBHのある取水口事務所までボッカして翌春にそなえた。

55年2月春山決定会議で「毛勝三山より剣岳に至る稜線に於いて、極地法による登高を行い、これの完全トレイスを目標とする」と決まり、期間は3月1日より約1ヶ月間とされ、次の19人が参加することが決まる。

隊長	脇坂 誠	OB	副隊長	斎藤惇生	医4
総務	中島伊平	経4	同	酒井敏明	文3
装備係	平井一正	OB	同	高村泰雄	農2
同	潮崎安弘	工1	同	高野昭吾	工1
食糧係	並河 治	農4	同	田附重夫	工2
同	荻野和彦	農1	同	岩坪五郎	農1
気象係	高谷好一	工3			
無電係	松浦祥次郎	工1			
同	高田方一郎	法2			
医療係	中島道郎	医4	同	藪内卓男	文4
会計係	笹川和朗	経2	同	小池祐策	農2

各キャンプ建設予定位置は次のとおり。CⅠ：毛勝西北尾根上1940m、CⅡ：釜谷山附近、CⅢ：ブナクラの科尔、CⅣ：白萩山附近、CⅤ：小窓王の科尔。剣頂上へはCⅤからラッシュアタックする。

1, 2回生には積雪期登山の経験が浅いものもいたため最初の1週間ほどCⅠまでの登路開拓と荷揚げ、テント設営にあてる期間に、できるだけ基本的氷雪技術の習得に努めることにした。後発メンバーがそろったところで全員を

3人パーティ6班に編成し(2班だけ4人)、ルート偵察と開拓、荷揚げなど適宜交代する。各キャンプ間の連絡を密にするため無電機を2セット携行した。(ほとんど使用できなかった)

雪上活動のあらまし

3月2日先発隊10人が縦走の出発点、毛勝西北尾根末端に近いBHに入り、3日登高開始。6日にほぼ予定された場所にCⅠを作る。後発7人が8日、後後発2人が9日BHに入った。11日釜谷山の北2400mにCⅡを、16日にブナクラ乗越の少し南寄り1800mにCⅢを作り、それぞれ6人用テントを張り、さらに居住性を良くし荷物置き場を確保するため近くに大きな雪洞を掘った。16日までは好天に恵まれ各班は連日ルート開拓、荷揚げ、設営、登路保守など、着実に前進を続けた。17日CⅢから第3班斎藤、高谷、潮崎と第6班平井、田附、高野がCⅣ設営に向かい、白萩山と赤ハゲの鞍部2200mに達したところ天候が急変し、早々その地にCⅣテントを張り第3班がとどまり、第2班は強風の中をCⅡまで下りた。18日は雨から雪に変わり、CⅡの6人がデポ地まで荷物回収に動いただけで、CⅢの9人、CⅣの3人はチンデン。19日寒気きびしいが快晴無風、CⅣの斎藤と高谷はルート偵察に出、大窓を突破しさらに前進、大窓頭の手前まで到達したが、時間が足らずそこから引き返す。CⅢから9人がCⅣにボッカ、このうち3人は白ハゲまで足を伸ばしたのち、CⅣに待機した潮崎とともにCⅢにもどり、脇坂、酒井、高村、松浦がCⅣに残った。この日の好天を利用して中日新聞社の小型機が飛来、山上のわれわれを撮影して帰った。

20日と21日は雪および風雪のため4つのキャンプはすべて停滞日となり、キャンプ間の出入りはゼロであった。3日ぶりの晴天になった22日、CⅣから6人がCⅤ予定地、大窓頭と池平山の間2500mに3人用テントを設営、斎藤副隊長、高谷、酒井の登頂隊員が入り、脇坂、高村、松浦はCⅣに戻る。中島、荻野、岩坪はCⅢからCⅣに入る。これで登頂態勢が整ったのであるが、最終キャンプを予定地より相当手前に作らざるを得なかった不利は認めなければならない。23日は終日風雪が厳しく、5ヶ所のキャンプはすべて停滞を強いられた。

頂上攻撃隊

24日高谷と酒井はC Vから頂上攻撃に出発、大窓からY状雪渓を登って小窓王の右を通過、三ノ窓で少憩をとった。コルから池ノ谷左俣谷におり、最上部の雪面をラッセル交代しながら登って池ノ谷乗越に着き、長次郎頭側にすこし登ったところで夕闇に閉ざされ前進不可となり、小雪洞を作って露営した。ほとんど眠れなかったが25日朝7時20分小雪散らつくなかを出発、登高75分で剣岳頂上に到達。首尾よく長い縦走路踏破に成功して握手を交わし、5分後帰途につく。露营地まで戻って残置した荷物を回収した。

二人して池ノ谷乗越に降りた途端、軟雪に全身が埋まるような形で雪崩を誘発してしまい、池ノ谷左俣谷の急斜面を、崩れ落ちる雪に翻弄されながら猛スピードで流された。前日時間をかけて登った雪面を恐らくほんの数分という超特急で落下し、谷の勾配が減じて雪崩の流速もおそくなり、最終的に停止した。幸い二人ともに数メートルも離れない場所で、雪の表面に下流側に頭、顔は上むきの寝ている姿でゆっくり流れてきて、ついに停止した。顔を見合せて互いに無事を喜び合った。高谷はピッケルをなくし、私のそれは柄のまん中あたりで折れていた。ただわずかにつながっていたので細引きをぐるぐる巻いて応急修理をし、杖がわりに使用することにした。停止地点は池ノ谷尾根の西側にある小支谷が左俣谷に合流してくる地点のやや上流寄り、(あとから地図の等高線を読んで)高度2550mあたりと判断される。乗越から高度差400m前後落下したことになる。

ここから三ノ窓コルまで雪崩れたあとのテラテラ雪面を、まともなピッケルを持たない二人が登るのにはずいぶんと苦労し2時間かけてやっと着いた。小窓王下部の岩場は昨日往路で固定ザイルを2カ所に設置してやっと切り抜けた難所であり、さらに急勾配で不安定な雪のルンゼの横断に苦労させられて、小窓王肩に着いたのは午後遅くであった。池平山が見える筈の地点まで進んでC Vの方に向けてコールをかけたが逆風で声は届かない。やや三ノ窓側にバックして風蔭になる小雪面を探し、そこに再び雪穴を掘り、露営した。

26日朝肩のコルからコールをかけるとやっとC V方面から応答があった。長いY状ルン



写真5 ザッカスの墓にお参りする 入善雲龍寺

ぜを頼りない杖1本、30mザイルでたがいに確保を交代しながら下降を続け、小窓のコルの下でC Vから迎えにきたワイさんとデルファに会い、頂上攻撃隊の任務は終了した。

翌27日から撤収をはじめ、30日にはC Iの最後の荷下ろしが終わり、全員BHに帰着した。取水口BHから第4発電所までおりると、会社はその夜のわれわれの宿として社宅の1軒をそっくり提供された。明るる31日全員魚津の町まで引き上げたのである。

以上でお分かりのように、この春山合宿は所期の目標は達成できたものの、ハイライト部分でぶざまな雪崩事故を起こし、幸い生命に別条は無かったものの間一髪でまぬがれたと言うのが実際である。くわしく語ること自体、当事者は常に恥入る思いを強くする。

おわりに

エルブーグに始まるヒマラヤ巨峰の初登頂黄金時代にまさに山岳部生活を送り山登りに精進していたわれわれは、いつかはヒマラヤに登るのだと、夢み希望を抱いていた。毛勝・剣縦走は一年以上をかけて準備してきた野心的な企画であって、終わったあとに大きな充足感を与えてくれたが、同時に反省すべき事項が多々あり、取り組まねばならない課題は大きく重く、忘れることができない歴史の一部になっている。

魚津市の宴が終わり、翌朝私は早く目覚めてしまったので6時前に宿をぬけ出し、青空のもと剣岳北方稜線を遠望した。剣の頂上付近だけが峨峨たる鋸歯を誇示する俊峰であるのに対し、北方十数キロにつらなる池平山、猫又山、

釜谷山、毛勝山などの穏やかな稜線はわれわれを招くように白雪に輝いていた。『報告』第5号の脇坂の文章を引く。「私にとっては故郷の山、毛勝岳の頂に足を運んだのは昭和二十一年の五月だった。阿部木谷の急な雪渓をつきあげて南峰と北峰のコルに立った私は今までにない感激をおぼえた。……」脇坂は剣の「頂に導く起伏——変化の多い稜線、何時かはたどる事を誓ったのはこの時だった」と書いている。

24日午前、急いで帰る要がなかった6人は「あの風とやま鉄道」（もと国鉄北陸線）で4駅東へ移動、入善町舟見の雲龍寺を訪れた。最大の盟友であった平井ポコさんの提唱に応じて実現した、故ザッカス隊長の墓参である。ご住職に慰霊の法要をさせていただいたのち、脇坂家先祖代々の古びた墓に眠る敬愛するザッカス先輩に、実に久しぶりの、そして感謝の念を新たにされた惜別の祈りを捧げたのである。

笹ヶ峰京大ヒュッテ 昭和40年・改築事業の思い出 前田 司

京都大学山岳部出身者間の親睦を目的にした会が「笹ヶ峰会」と名づけられたのはまさに言い得て妙である。山岳部に1年でも在籍した者の最少の共通項である笹ヶ峰、とりわけ「笹ヶ峰京大ヒュッテ」は1回生の夏のヒュッテ番から冬のスキー合宿と否応無く付き合わされる。

京大の学生部から運営を任されたこのヒュッテは、夏、秋に一般に公開することで部費の大きな収入源となっていたので、夏前に宣伝ポスターを作って勧誘する。山以外の新入部員の大事な活動である。小学校の図工の時間に描かされた運動会や学芸会のポスターを思い出しながら、まだ見ぬヒュッテの姿を先輩の言う通りに描いて学内や関西の大学に貼りに行く。どうせ客を呼ぶならメッチェンをと女子大が中心だ。掲示の許可を得るために女子大の庶務課を訪ねる。職員がヒュッテについて質問する。「当然男女は別々の個室になっているのでしょうか？」こんなこと訊かれても行ったことも無いのを知るわけがない。「勿論厳重に区画されております。ご安心を」と掲示の許可をもらう。

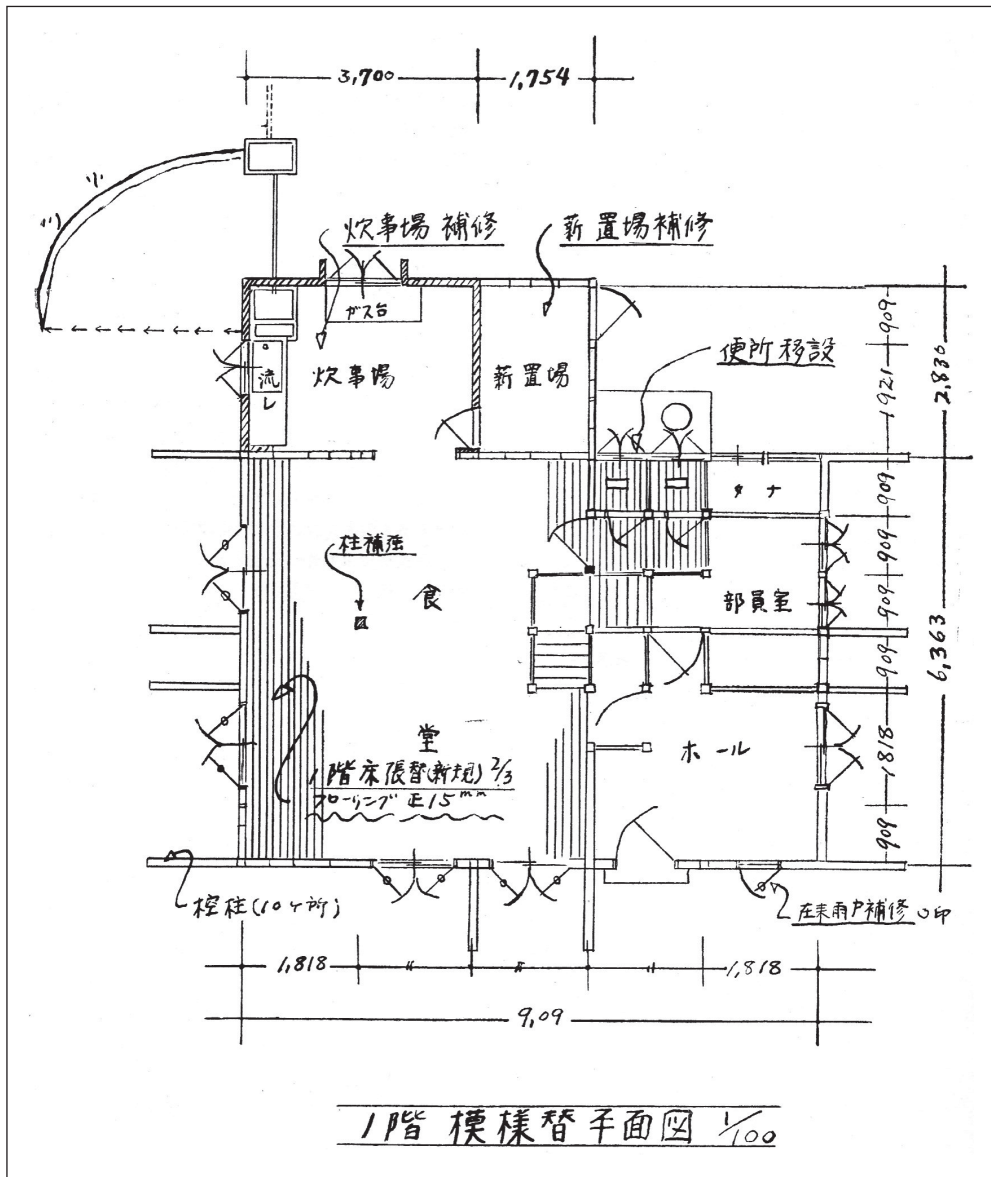
夏の合宿や分散山行の合間にヒュッテ番が回ってくる。とくに1回生は何日間は勤めねばならぬ。朝は夜明け前からお客さんから預かった飯ごうの飯炊き。このころのヒュッテの寝具は米軍払い下げの毛布。先輩よりの言い伝えによれば、朝鮮戦争の米兵の死体を運んだ毛布だそうでお客には内緒。こんな寝具だから朝方の寒さでメッチェンが起きてきて、外の窯場の火にあたりにくる。胸がときめくひと時である。

昼間は火打、妙高、黒姫へとガイドの仕事。空身は勿体ないから、上の高谷池ヒュッテへ灯油の一斗缶を担いで上がり一稼ぎする。夜はランプを囲んでお客と一緒に団欒。多くは歌を歌う。当時流行りのロシア民謡が幅を利かせていた。一年先輩の池野ゲボはその頃流行っていた歌声喫茶「炎」で歌唱リーダーのアルバイトをしていたのでその歌声の素晴らしかったこと。

そして冬。スキー合宿である。食料係となったが、クラスの忘年会で食料費を使い込んでしまい、丹波口の卸市場で野菜を拾って埋め合わせする。しかし冬場に捨てられているのは白菜か大根ばかり。これを担ぎ上げたが、斎藤 Y 先輩から大目玉を食らった。三田原山からの滑降では、脇坂ザッカス先輩の羽毛服がタラノ芽の棘に引っかかってばーっと花火のように羽毛が飛び散った光景が目につかぶ。

えらい前置きが長くなったが、昭和3年(1928)高橋健治、今西錦司らによって建てられた笹ヶ峰ヒュッテが、1999年に新しく生まれ変わるまでの70年間、戦後からでも50年余、山岳部に籍を置いたものにとってはこのヒュッテはかくも思い出多いものである。山岳部OBを中心とした浄財で新時代にふさわしいモダンなヒュッテが建てられたが、自分の山岳部の原点にある笹ヶ峰ヒュッテは昭和を生き抜いたあのヒュッテである。

この昭和のヒュッテが豪雪地帯にあって70年間も持ちこたえられたのは、戦時中、地元の岡田長助の奥さんの「よめさん」が細やかに



管理していただいたことに加えて、昭和40年(1965)に行った大改築がその後の35年余の延命となった。新ヒュッテの建設により姿を消した昭和の笹ヶ峰ヒュッテではあるが、この延命の大改築に携わった世代として本誌にこの事業の思い出を語っておこう。そしてこの事業を通じて笹ヶ峰ヒュッテの京大山岳部と大学における関係や地元との貸借関係が改めて認識されたことも大きな収穫であった。

昭和39年(1964)の8月。笹ヶ峰ヒュッテには満員の客が泊まっていた。夕食後どーんという鈍い音。二階の客が「チーフさん、床が抜け

ました」と慌てて降りてくる。見ると15cmほど床が落ちている。築後36年が経ち老朽化が問題になり出していた。ついに来たかと思ったが、そこは客商売。何食わぬ顔でとりあえず男子は外に合宿帰りのテントを張り、女子は牧場小屋で寝てもらおう。部員の一人を杉の沢に走らせ大工を呼び、京都の留守本部に連絡。翌日大工が上がってきて、落ちた根太を持ち上げ、一階ホールの柱と柱とをワイヤーで締め上げた。大工はこれで1年は大丈夫と言ったがシーズンが終わるまで冷や汗のものであった。

京都では早速ヒュッテ係の田中昌二郎(ショーチン)にリーダー、サブリーダー、マネージャー

が委員となって「ヒュッテ改築委員会」が結成された。新築か改築かがまず問題になったが、誰もが西洋風のあのモダンな建物へのノスタルジーを持っており、積極的に新築（もちろんデザインはほぼ同じとしても）の意見は弱かった。またそれだけの財力も見込めなかった。改築（修復）するとして、一体どこを直せばいいのか。老朽化と言うだけでは話にならない。新米の建築学士富田幸次郎さんと呼んでは見たが、調査せなわからんとのこと。そこで秋のヒュッテの一般公開の前に調査隊を送ることとなる。

9月に新潟大地震が起こったがヒュッテは被害無しであった。10月の初め建築学科の富田OBと富永助教授が調査に入る。その結果、ヒュッテが西ないしは西南の方向にねじれるようにして歪んでいることが判明した。これは東側に後年付け加えられた屋内便所に雪が積もりその荷重が西方向に働いたとのことであった。さらに建築時の基礎が不完全でかつ通風が悪く一部の柱の下部が腐食している。これでは寿命は良くて5年、早ければあと3年とのこと。数日後からの秋の一般公開は定員を15名に減らしてこわごわ開業。

秋山山行を終え、増田和生（エッチュウ）の新リーダー、山田睦郎（ニタコ）、林克（タージ）のサブリーダーのもとで改築委員会が再開される。山田ニタコはヒュッテ係も兼ねこの委員会の長となる。夏の根太落ち事件の現場にいた小生も加わり13名の委員会が発足。

さて改築にあたりその資金はどう工面するのか？ 安田武OBの一文「笹ヶ峰ヒュッテ再開の頃」（京大山岳部「報告14号-1967年刊」）によると、戦後このヒュッテを京大山岳部の活動の場にしようと修理の費用を大学に持ちかけたが、この所有者の名義は高橋健治夫人のローゼさんとなっている。大学が個人所有物に金は出せないとのことで、高橋夫人や今西、桑原先輩を口説いて昭和26年頃に大学に寄贈され京大の所有となった。京大はこれを経理課管財掛所属の国有財産とし、京大の厚生施設に組み入れられ管理は学生課とされた。学生課ではスキー部より寄贈された志賀高原ヒュッテとともに、その運営はそれぞれ体育会に所属するスキー部と山岳部に委託されることとなった。

委員会では、笹ヶ峰ヒュッテは京大の物だから当然大学が金を出すべきだとの正論でまず厚

生課に改築資金の拠出を願い出る。しかし大学はあれは仮建造物ゆえ崩壊すればそれまで、とけんもほろろ。厚生課へお百度を踏むうち、修繕ならなんとかしてしてみようとなり、年末冬山準備で慌ただしい中、修理箇所の明細を提示せよとの回答を得た。こうなれば現金なもの、富田OBと山田ニタコが基礎工事や傾いてる柱、ついでに不便なところをあれやこれやと盛り込んだ明細書を1月末に提出した。

しかしここはお役所。待てど暮らせど回答は来ない。春山も終わり新年度を迎える。そして桜の便りに乗って予算決定の報が入る。なんと予想価格の倍近い総額75万円。要求のほぼ満額である。こんなことなら大学への要求の明細には盛り込まなかった屋根の葺き替え、畳の新調、寝具の購入、ストーブの新調などなどもっと膨らませておけばよかったと悔いるが後の祭り。これらはOBからの寄付に頼らざるを得ない。目標額を30万円としてお得意の狸の皮算用とどんぶり勘定で寄付願いの手紙をOB宛に送る。しかし折しもオリンピック不況で集まりはよろしくない。それでも夏の終わり頃にはなんとか20万円を越し、大学からの工事に補足する事が出来た。

一方5月には大学の施設課が現地を調査。これに基づき工事仕様、図面が仕上げられた。この図面を見て驚く。なんとヒュッテが倒壊せぬように周りに10本ものバットレスが入ってる。聞こえはいいが要するにつっかい棒である。崩壊寸前の掘立小屋のような姿を思い浮かべると愕然とする。とはいえこれを入れぬと内部をなんぼ改修しても10年は持たぬと言われると妥協せざるを得ない。緊急の委員会が開かれてこのみすばらしい(?)姿をいかに隠すかが討議された。ベランダを作ってはという案が出されるが金がない。しかし出来上がってみるとさほど見苦しいものではないこととなりベランダ案は立ち消えになった。

工事開始が8月下旬と決まる。現場監督は幸いにも(?)この春留年とあいなった小生が当たることとなった。秋までの長丁場である。8月25日から水路の工事、30日より在来便所、物置の取り壊しと本屋の基礎工事。9月10日には件のバットレスの取り付けが完了した。ここから内部の工事。一人寝るところだけ残して、2階の床や、窓枠が取り外されがらんとな

る。ヒュッテの前の芝生には昭和3年馬で運びあげられた古材が山をなしている。

途中台風が襲来して大工が3日も休んだ時はなんとも心細いうえ、夜な夜な猫がやってきてニャオーンと鳴き出すきみ悪さ。一杯やらずば寝られない。この頃三本木に武庫川女子大がレルヘンヒュッテを建設。大工は此処も受け持っており、女子大の方へゆきたがる大工を引き止めねばならない。何日も現場監督（要は大工のお茶汲み）をやっているとちよいと口出ししたくなるもの。台所に大きな竈をしつらえて大釜でお客の飯を炊くようにした。大人数の時の自炊用に台所の外にも流しを作る。

9月20日には台所、薪小屋が出来、25日には屋根の葺き替えも仕上がる。赤い塗装は一年置いてから。古い屋根のトタンは防寒として天井裏に貼ってもらう。残りはストーブの煙突に。最後に一階ホールの床が貼られ改築は終了する。先輩の寄付のおかげで寝具も新しくなった。うまく1回生にシュラフ製造会社の息子が入部してきたので、見切り品を20枚半額以下で購入する事が出来た。

10月4日からの秋の一般開放に合わせ1日に部員が上がってきてくれた。山のように出た古材を薪小屋に積む。3日には新畳が上がってきた。オープン初日にやってきた女性のお客は山に登らず畳のカラ拭きや床掃除などに精を出してくれた。夜ストーブに火をつける。37年

の星霜を眺めてきた古材は面白いほどよく燃えたが少しばかり気が引けた。

10月14日、京大の施設部が監査にくるといふ。伏見の特級酒を用意してお迎えをする。この日をもって改修工事の完成とする。

この改築工事に合わせ、京大は妙高高原町と下記のような財産使用の申し合わせを交わした。

1. 借用地：ヒュッテ建坪を含め300坪
1. 借用期間：昭和39年7月1日より昭和49年6月30日まで
1. 借入金：無償（但し協力金として年3000円を妙高高原町に支払う）

これらの申し合わせ事項はその後改められているかと思うが京大の国有財産としてしっかりと管理されているはずである。

翌年、3月20、21日に改築を記念してOBの会が開かれた。小野寺、山口克などOB25人に木村、吉野、泉谷など現役が参加。酒2斗を荷揚げするが不足するほどの盛会であったそう。

ともあれこれで笹ヶ峰ヒュッテはその後35年長生きしてくれた。

もはや役立たずとなったが、思い出の一端として改築時の一階平面図を掲げておこう。

本改築の事業の詳細な報告（施設部指定工事要項、工事仕様、一回平面図、OB寄付金決算報告）は京都大学山岳部「報告14号」1967年刊をご参照下さい。

第46回雲南懇話会のご案内

第46回雲南懇話会を以下のとおり開催致します。

1. 日時：2018年9月29日（土）13時00分～17時00分。その後、茶話会17時30分～19時00分
2. 場所：東京慈恵会医科大学 高木2号館 地下1階「南講堂」（東京、新橋）
3. 懇話会の内容

①「地質時代に日本の地名が刻まれるか？」
—千葉時代（チバニアン）国際模式地認定への展望—

②「西ネパール地域の登山と山旅、人々の暮らし」
—同志社大学山岳部極西ネパール登山隊2015年、2017年の記録から—

同志社大学商学部3回生、
体育会山岳部主将 須見 遼介

③「低酸素症／低体温症／熱中症の分子メカニズムから考える癌予防」

—還暦誕生祝いに登った 劔岳チンネ左稜線—
国際山岳医、JAC 東海支部技術向上委員会委員、
至学館大学教授 三浦 裕

情報・システム研究機構
国立極地研究所准教授 菅沼 悠介

④「照葉樹林のキノコ食：雲南の野生菌火鍋にたどりつくまで」

京都大学霊長類研究所教授・所長、
ヒマラヤ研究ユニット長 湯本 貴和

会員動向

新入会員

山地崇博 工・建築 H30 工院生
濱田錬 経済 学生
磯川厚仁 農 学生
梨元昂 理 学生

逝去

今川好則 2018年5月25日逝去

会員異動

牛田一成 勤務先変更
加藤恵美子 自宅変更
川畑天馬 自宅変更
栗本俊和 メールアドレス変更
外園喜大 自宅変更
平沢秀夫 勤務先削除
山本良三 電話番号・メールアドレス変更

編集後記

猛暑の夏もようやく終わりそうですが、集中豪雨や強い台風などの大きな被害も伝えられており、心配しています。

災害に結びつく「極端気象」といわれる現象がかなり高い頻度で起こっているような印象ですが、気象庁の統計でも、1時間降水量 80mm 以上や、日降水量 200mm 以上の発生する頻度などは上昇傾向にあるとのこと（気象庁ウェブサイト）。日常生活に限らず、登山でもこれまでにないような極端な気象に遭遇する可能性が高まることになり、いっそうの注意が必要でしょう。

安仁屋さんから、最近では登山の記事が少ないので、とカムチャッカでの山スキーの記事をいただきました。天候に恵まれて十分に楽しめたようです。酒井さんの記事では、いまは穏やかな先輩方の、厳しい登山への当時の意気込みが伺われます。前田さんには、旧ヒュッテ 70 年あまりの歴史の、ほぼ中頃に行われた大改修の様子を書いていただきました。皆様ありがとうございました。

書きとどめておくべき記憶のご寄稿を、ぜひよろしくお願いいたします。

横山宏太郎

次号原稿締め切り 2018年10月16日

原稿送り先：横山宏太郎

発行日 2018年9月15日
発行者 京都大学学士山岳会 会長 松沢哲郎
発行所 〒606-8501
京都市左京区吉田本町(総合研究2号館4階)
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究
研究科 竹田晋也 気付
編集人 横山宏太郎
製作 京都市北区小山西花池町1-8
(株)土倉事務所